

ESD×CSR SDの“D”とは

2009.07.12
立教大学ESD研究センター研究員
中野民夫
(柳博観堂／ワークショップ企画プロデューサー
／立教大学院・明大・聖心女子大兼任講師)

1

開発／発展についてもっと話そう！

- 有限の地球の中で無限の経済成長を前提とした「開発／発展」は、行き詰まっている。
- Sustainable Developmentの訳は、持続可能な、「開発」？それとも「発展」「成長」？
- そもそも「開発／発展」って何だったの？
- だいたい、これまでの「開発／発展」って、根本的に見直さなきゃでしょ！
- **今必要な「開発／発展」について、もっと議論しようよ！**

2

“Development”とは？

- “development”を英和辞書で引くと、
 - 発達、発育、**成長**(growth)
 - **発展**(progress)
 - **開発**、造成
 - 進化(発展、発達)の結果、新事実
 - <数>展開、<写>現像、<音>展開(部)
- “sustainable”:維持[継続]できる

3

“Sustainable Development”

- 持続可能な「**開発**」？
 - 「開発」=(天然資源を)生活に役立つようにすること
- 持続可能な「**発展**」？
 - 「発展」=さかえゆくこと。「経済の-」
- 持続可能な「**成長**」？
 - 「成長」=育って大きくなること
- 訳の違いだけでは済まない本質的な問題！

4

先進国と途上国のズレ

- ヨハネスブルグサミット(2002)で実感
- 先進国のニュアンス
 - **持続可能な、開発／発展**
 - 環境危機克服には抑制して持続可能にしないと！
- 途上国のニュアンス
 - **持続可能な、開発／発展**
 - 先進国がおかしくしてきた世界。自分たちはまだまだ開発／発展が必要！

5

『経済成長がなければ
私たちは豊かになれないのだろうか』
ダグラス・ラミス著、
平凡社ライブラリー刊より、

6

経済発展はひとつのイデオロギー

(思想傾向、政治や社会に対する考え方)

- ある友人:「アメリカはまだ発展できるね。街の近くに森があるから」
 - 経済発展のイメージ: 世界中で森林がどこかに残っていれば、まだ発展が終わっていない。
- これは20世紀の経済発展イデオロギーの大前提。
 - 「経済発展が必要である」という点に関しては、自由主義者、保守主義者、民族主義者、ファシスト、レーニン／スターリン主義者もみんな共有していたものの考え方。
 - このイデオロギーはいったい何だったのか？

7

経済発展イデオロギーが生まれた瞬間

- アメリカ大統領トルーマンの1949年就任演説
 - アメリカには新しい政策がある。=未開発の国々に対して技術的、経済的援助を行い、そして投資をして発展させる。
- 「未開発(アンダーデヴェロップド)の国々」という用語は、それ以前には使われていなかった。
- 「発展(デヴェロップメント)」という言葉がトルーマンの演説で変えられた。
 - 「発展」が初めて国策になった。
 - 発展させられる国は、アメリカではない別の国

8

「発展する」は本来自動詞

- 「国Aは国策として国Bを発展させる(開発する)、それが国Bの発展である」
- 日本語の「発展」や「成長」もそうだが、英語の「発展する(デヴェロップ)」は、本来自動詞。他動詞ではない。
 - だからふさわしくないように聞こえる。
 - 国Aが国Bの「発展」を政策としているのに、その表現は自動詞ということになって、大きな矛盾。

9

「発展」は作り変えられた言葉

- “develop”
 - 本来の反対は“envelop”「包む」こと。風呂敷や紙に包む
- その反対、「ほどく」「とく」、紙や布に包まれた何かを出す、という意味。
 - たとえば、蕾が花になる、種がだんだん成長して植木になる、子どもが大人になる、とか。
 - 主に生き物の、生命あるものの成長のこと。
 - ある段階から次の段階へ変わっていく変化。前段階の中に、後の段階が組み込まれ内在されている。
 - 前段階の可能性が次の段階で実現する。

10

- 日本語の「成長」=「育って大きくなること」、
「発展」=「伸びて広がること」は、developとほとんど同じイメージ。
- 「開発」=「開き起こすこと」(これは他動詞)
- 一種の構造に従うような変化を「発展」と呼ぶ。
 - 完全に人工的な変化は「発展」ではない。
 - 陶器を作るとき粘土で形を作る。
 - 木を倒し木材にして建物を建てる。
 - 森林を伐採して駐車場にする。
 - これらを発展とは呼ばない。

11

「未開発」は「野蛮人」の言い換え

- 世界中の金持ちではない国を「発展させる」のがアメリカの国策と言い出したのはトルーマンが最初。
- その後半世紀にわたり、経済発展はアメリカ、国連の政策として続けられてきた。
 - 地球上のすべての文化、社会、経済、人の生き方、自然、あらゆることを変えるこれほど大規模な国策というのは人類史上に例がない。
 - 西洋の経済制度に入っていない国はすべて「未開発」と呼ぶ。アマゾンの先住民も北米インディアンもエジプトも。
 - 「キリスト教徒」と「異教徒」、「文明国」と「野蛮」、「ヨーロッパ」と「ヨーロッパ以外」。
 - 「野蛮(バルバリアン)」が「未開発」に置き換わった。

12

そして搾取は見えなくなった

- トルーマンの演説の頃
 - 第二次世界大戦直後で植民地を持つてはいけない。
 - 第三世界に対してアメリカが一番力を持っていた。
 - 冷戦が始まり、第三世界で激しい覇権競争。
 - 好景気のアメリカは投資をする場所を探していた。
- 数年前から、グローバリゼーション
 - 植民地主義も、帝国主義もグローバリゼーション。
 - しかし、今よりも正直な側面があった。つまり、「これは搾取である」ということをみんなが意識していた。
- 20世紀の後半になって、経済発展イデオロギーが主流になると、搾取されることが結果的に自分の利益につながるというごまかしはかなり成功し、搾取される側にも定着。
 - つまり、本来他動詞であることが、まるで自動詞であるかのような錯覚を与えることに成功した。

13

- これを「発展」と呼べば、あたかも、それぞれの文化、文明、社会のなかに隠されていた可能性が解放されるかのようなイメージ。
 - 花が咲くような。子どもが成長するような。
 - 「搾取」という言葉とはだいぶ違うことを指している。
 - 「世界中のあらゆる文化のなかには、産業革命を起こして産業国になる内在的な可能性がある」という言い方。
 - これにたくさんの人が説得された。
- 外から資本が入り、自然を壊し、伝統的な文化を怖し、搾取する。植民地時代と同じ。
 - それを「発展」と呼べば、その社会の、自然で当たり前な、決定された過程であると思えてくる。
 - 内政干渉ではなく発展、搾取ではなく発展、暴力的な変化ではなく発展。内在的な能力を解放するようなイメージ¹⁴に。

スラムは近代建築だ

- 私たちが経済発展と呼んでいること、それは地球上のすべての人間、すべての自然を産業経済システムの中に取り入れること。
 - グローバリゼーションは新しい現象ではなく、植民地時代から進行し、今やこの資本主義、産業経済システムは地球の隅々まで根づいた。
- 経済発展とは「スラムの世界」を「高層ビルの世界」へと少しずつ変身させる過程だというのは錯覚であって、ごまかし。
 - 経済発展の過程によって、昔あったさまざまな社会が「高層ビルとスラムの世界」になってきたのが、20世紀の歴史的事実。
- 経済発展は、南北問題を解決するのではなく、原因の一つなのです。

15

16

開発(かいほつ)から開発(かいほつ)へ

『仏教・開発・NGO
タイ開発僧に学ぶ共生の智慧』
(西川潤・野田真里編、新評論刊)より

17

(前段)「内発的発展論」

endogenous development

- 途上国の「開発」= 西欧化という近代化論のアンチテーゼとして登場。
- 日本では鶴見和子が、
 - 先進国の模倣ではない、伝統、社会構造など、自己の社会に内在するものの上に立ちながら、外来の開発モデルを自己の社会の条件に適合するよう創りかえていく発展のあり方を「内発的発展論」とよんだ。(1976)
- それぞれの社会にはそれぞれの発展の道筋がある
- 内発的発展を促す=「住民」は支援を受ける対象ではなく、それを活用する主体となる。

18

開発＝「かいほつ」と「かいほつ」

- アジア諸国で、**経済至上主義的な開発路線**を批判し、市民社会の民衆による「**もう一つの発展**」をめざす**内発的発展の動き**が広がっている。
 - とくにタイでは、仏教の革新と僧と連帯する知識人・NGOの独自の開発運動が進展。
- 西洋近代をモデルとした**従来の「外発的・他律的な経済中心の開発」**から、独自の伝統文化や共生の智慧(仏教)に基づく「**内発的・自律的な人間中心の開発**」への、開発の**パラダイム転換**が起きている
 - この新しいパラダイム、仏教に根ざしたオルタナティブな内発的発展、仏教的開発の思想と実践を「**開発(かいほつ)**」と呼ぶことにしよう。

- 開発:「○○を開発する」(他動詞)として用いられ、「**上から／外発的・他律的に、人為的に**」のニュアンス。
 - 自然を切り開き資源を人間社会の役に立てること、未開の土地や社会を切り開いて近代的なものにしていくこと。
 - 江戸時代の「**新田開発**」に始まり、北海道拓殖開発など。
- しかし、「開発」という語は、本来**自動詞**の意味。
 - 英語の“development”の語源: **封じ込まれていたもの、包まれていたものが解き放たれる**、という意味。
- 日本においては元来「**開発**」は**仏教用語**として用いられてきた。
 - 仏教用語の「**開発(かいほつ)**」は、現在の開発とは全くニュアンスが異なり、「**内から／内発的・自律的に、自然に**」という意味合い。

20

- **開発(かいほつ)＝上から、外発的・他律的、人為的**
- 「**開発(かいほつ)**」＝**内から、内発的・自律的、自然に**
- 仏教においては、人間を含む一切衆生は、悟りを開き、仏になる潜在能力である**仏性**を備えている。
 - 仏性とは、この地球社会や宇宙を司る**相互依存の法則(縁起の法)**という自然・人・社会の本来のあり方に目覚め、生あるものすべてに**慈しみ**をもち、あらゆる苦から解き放たれていく能力。本来の人間性・自然性。
- 「**この仏性を仏教の実践を通じて開花させていくことこそ、仏教でいう「開発(かいほつ)」**」

21

パッターナーとパワナー

タイの学僧バユット師

- **パッターナー(かいほつ): タンハ(貪欲)に基づいて他律的・外発的に物質的富を増やすこと**
 - この物欲に基づく開発こそが今日のタイ経済成長の原動力。
 - だが同時に、格差・貧困・環境破壊・人心や共同体崩壊などの問題を生み出した。
- **パワナー(かいほつ): チャンタ(精進意欲)に基づいて「心の開発」(瞑想)を行い、物欲を自制しつつ、掠奪的でない自律的・内発的な調和の取れた節度ある開発／発展をめざすもの**

22

開発(かいほつ)とは

- 仏教という一宗教を超えて、地球社会全体の共生や真の開発／発展のあり方に対する普遍的な示唆を与えている。
- 今日的に定義し直せば、「**開発(かいほつ)**」とは、「**我々の社会や個人が、その本来のあり方や生き方に目覚め、自然および他の社会や個人との共生のために、苦からの解放をめざして、智慧と慈悲をもって自らの潜在能力を開花させ、人間性を発現していく、物心両面における内発的な実践**」といえる(西川・野田)

23

今必要なdevelopmentとは？

24

相互依存(縁起)の理解を

- すべてのものには、わかたれて独立した実体はない。
(空、無我)
 - 一枚の葉の中に、太陽、水、土、時間、空間、心を観る
- 無常: すべてものは固定的ではなく、関係(縁)の中で発生し、常に移り変わる「現象」である。
 - それなのにこだわると苦しみを生む。
 - 「動的平衡」(福岡伸一)
 - 生体を構成する分子、組織は常に更新され続け、環境は常に私たちの身体を通り抜けている。あるのは流れでしかない。流れ自体が「生きている」ということ。

25

自利と利他をひとつに

- 「自利」= 自分の利益。自分を利すること
- 「利他」= 自分を犠牲にして他人に利益を与えること。他人の幸福を願うこと。(⇔利己)
- グローバルな社会の中で、あるいは生命世界の中で、私たちはつながっている。
 - 世界の環境も社会も決して無関係ではあり得ず、自分だけの安全や幸せはない。
- 従って、この両者をひとつにすることが課題
 - 「持続可能な開発/発展」: 現世代と将来世代
 - CSR: 自社とステークホルダー・社会
 - 社会・組織・集団と個人の生き方

26

自然から学ぶ

- 「自然」は日本ではもともと「じねん」
 - “nature”の訳語として、明治以降使われた
 - 「自ずから然り」
 - 「おのずとそうなる様」を表した福祉/形容詞
 - 内発性/自発性のヒントがありそう
- 生命世界が相互依存関係の中で個体としての誕生・成長・死を繰り返しながら、種や全体として継続している姿から、学ぶことは多い
 - 「自然が先生」

27

参加型で学ぶ

- 自発性を引き出し育てるには、知識の一方的な伝達では無理。
- 自ら参加し、コミュニケーションの相互作用の中で、「他人事」が「自分事」になる。
- 当事者意識や主体性が深まり、コミットメントが自然に出てくる。
- 知恵も力も「関係」の中から生まれる。
- 「ワークショップ」や「ファシリテーション」の意義

28

「幸福感受性」を高める

- 「豊かさ」「幸せ」って何だろう？
- GNPからGNH(ブータン)
- 「足るを知る」
- 社会のシステムを考えるのと同時に、幸福感受性を高めること、感受性の解放に取り組むことが大事(見田宗介)
- 宮澤賢治: 『農民芸術概論綱要』

29

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する
新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは 銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである

われらは世界のまことの幸福を索ねよう

求道すでに道である

宮澤賢治『農民芸術概論綱要』「序論」より

30

ESD × CSR

31

持続可能性の「三つの公正」

(阿部治氏より教示)

- (1)「世代間」の公正：
将来の世代につけを残さない
(孫や未来の子どもたち、7世代先を考える)
- (2)「世代内」の公正：
社会的弱者につけを回さない
(途上国の児童労働、南北や国内の格差)
- (3)「種間」の公正：
人間だけでなく生態系から考える
(地球は万物の母、生物の多様性を守る)

32

つまり、「持続可能な社会」に向けての
企業活動や市民の生活は、

自分たちだけでなく、

1. 将来の世代(未来)
2. 途上国や社会的弱者(他者)
3. 生きとし生けるもの(自然)

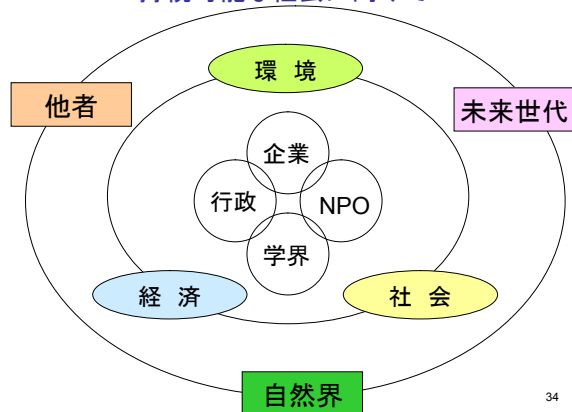
のことを配慮し、責任を持つことが不可欠！

この視点が、CSRの基礎であり評価にも重要！

その徹底は容易ではない。

33

持続可能な社会に向けて



34

しかし、人間はそこまでなかなか考えられない。

人間の視野

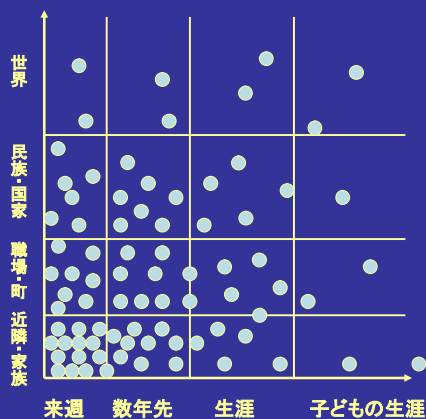
『成長の限界』(1972年ローマクラブ「人類の危機」レポート)

世界中のすべての人は、それぞれ注意と行動を必要とする一連の関心事と問題をかかえている。

地理的・空間的な広がり、
時間的な広がりがどれくらいあるか、

ほとんどの人々の関心は、グラフの左下に集中している。

35



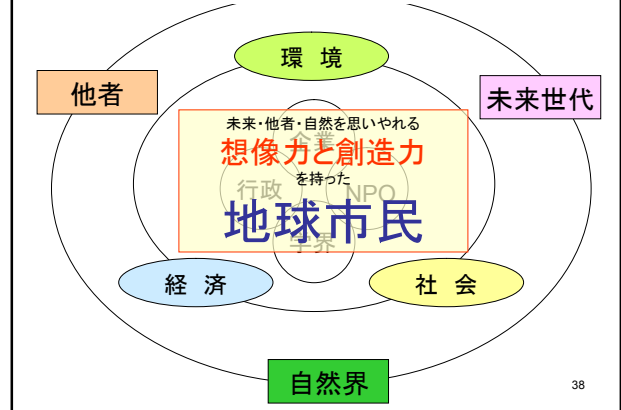
36

ここにESDの存在意義

- ESD(持続可能な開発のための教育)
 - 1) **未来**(将来世代、社会・地球の将来)、
 - 2) **他者**(身近な他者～遠い他者)、
 - 3) **自然**(生物多様性、生態系)、
 - への影響を想像でき、自分(たち)とこれらを共に活かしあえる社会を創造できる**人を育成する**
- **想像力と創造力を養う**
 - 「教育」も教え込むことでなく、本来引き出すこと
 - そのためにも、参加や体験、対話は不可欠
 - 「参加型」(ワークショップ、ファンリテーション)の意義

37

真ん中にあるのは、「人」。私たち一人ひとり。



38

ESD × CSR

- サステナビリティをあらゆる分野／局面で考え応用できる人や環境を育む。
 - 企業など組織の中で前記のような意識を持って新たな企業・組織活動を創造し、持続可能な社会づくりに貢献できる人を触発し育てる。
- 「インプレナー」(アントレプレナー＝社会起業家の社内版)の誕生を促す。
 - 企業など既存組織内で新しいことを始めるのは大変なこと。多くの関係者を説得し巻き込み、形にすること、しかもビジネスにすることは並大抵ではない。
 - 共に考え、行動し、励まし合えるような仲間が必要

39

加藤尚武(環境倫理学)の持続可能な開発の矛盾と限界

- 環境倫理の加藤尚武『新・環境倫理学のすすめ』より(別紙資料)
- 「成長か持続可能性か」という選択の可能性はない。成長を続けていけば、必ず持続不可能という事態に到達するのだから、「成長から持続可能性へ何時自覚的に転換するか」という選択の余地があるだけである。
- 多くの人は「持続可能な発展を守る」というテーゼを承認したとしても、多少は持続可能性に配慮した発展を図るべきだと考えている。そして「持続可能性への配慮」という契機と発展という契機の配分比率について賢明な選択をすべきだと考えて、結局は、「持続可能性への配慮」を最小限にしようと努力する。
- 経済的に見てどれほど有利な化石燃料が残存しているにしても、それを使わず封印して、再生可能エネルギー資源を開発することが、正しい選択なのである。もちろん、化石燃料が温暖化の原因物質を排出するという理由も成り立つ。もしも石油が事実上無限に存在し枯渇しないとしたら、人類は地球温暖化の弊害を避けることができなくなる。

40

- 『ブルントランド委員会報告書』では、(中略)、結局、枯渇までの成り行きを見ながら利用するという方針を示している。
- ブルントランド委員会報告は、「最後には枯渇型資源への依存から脱却する」というシナリオを示さず、当面は資源の枯渇には直面しないという想定で、シナリオを書いたため、結局、可能な開発の限界を定めることができなかった。
- そこに、ヴォルフガング・ザックスが指摘しているような環境政策のひずみ(「持続可能性の位置づけは、いつの間にか自然から開発に移っていく。一言で言えば、**持続可能性は自然の保護ではなく開発の保護になったのである**」)をもたらす結果になった原因がある。(以上、加藤)

↓
今や、経済成長、それも化石燃料に頼った経済成長と、持続可能性は両立しない、とはっきり認識するところから考えることが必要ではないか？

41

GNH: 国民総幸福量

- ～GNHの根本をなすもの～ 平山修一 <http://www.gnh-study.com/index.php>
- GNHは様々な場所で脚光を浴びている。発端となったのは小国の国王の発言から。
- 「Gross National Happiness is more important than Gross National Product」
- これは1976年(昭和51年)12月、スリランカのコンボにおける第5回非同盟諸国会議に出席後の記者会見席上での、当時21歳(国王就任4年目)の現国王の言葉。
- 国王はこの書面の中で、国民総生産(GNP)と国民総幸福度(GNH)は同様に大事。
- 次にGNHが国際的に評価を受けた最初の出来事は、1998年韓国ソウルで行われた国連開発計画(UNDP)のアジア太平洋地域会議の席でのスピーチ。
- 当時のブータン王国首相、ジグメ・ティンレイ(Jigmi Y. Thinley)は席上、「Gross National Happinessはブータンの開発における最終的な目標である」と述べた。加えて「**私達は私達に基本的な事を問う、どうやって物質主義と精神主義とのバランスを維持しつづけるか**」と、先進国の示す発展型に対して大きな課題を投げかけた。
- これは簡単に解釈すると、「先進国に対しては経済成長だけがグローバルスタンダードではないと訴え、途上国には開発や援助による国連が必ずしも万能ではないのではないかと、人々が貧しくとも心豊かであればそれなりの幸福感のある社会が実現できるのではないかとの問題意識を投げかけている」と言い換えられるのではないであろうか。

42